
最後の神が護る国

薄墨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の神が護る国

【Nコード】

N9827K

【作者名】

薄墨

【あらすじ】

最後の神が護る小さな国。記憶を持たない少女ユキは、どこか陰のある青年、レヴィンに拾われる。レヴィンの住む古びた屋敷と、その住人である双子の姉弟。最後の国に住む優しい人々。穏やかで楽しい生活の中で、ある日ユキは自分の生きる意味を見つける。自分がいまここにいること。それは、希望であるはずだ。

雨の中、少女は始まる

冷たい。

それが、彼女が最初に感じた感覚だった。

なぜ冷たいのだろうか？　そう不思議に思って、彼女は世界を意識した。

途切れることなく聞こえてくるのは、聞き覚えのある静かな響き。柔らかく湿った匂い。

ポツリ、ポツリ、と冷たいなにかが優しく彼女の頬を叩いて、流れた。

なんだろう、これは。

この音を、この温度を、この香りを、彼女はよく知っている。懐かしいというにはあまりに身近な、

「……雨は、」

不意に、声が聞こえた。

「冷たくないのか」

低く落ち着いた、若い男の声だった。言葉だけを聞けば心配しているようなのに、その声には少しの優しさも感じられない。ただ本当に、雨が冷たくないのかと疑問を問う声だ。

「……あめ？」

口にして初めて、ああ、これは雨なのだ、雨が降っているのだ、と彼女は気づいた。

「冷たい」

冷たい。けれど、なぜかとても優しい。

「起きろ」

同じ声が、さっきよりもずっと近くから響いた。響いた——いや、降ってきたと言うべきだろうか。彼女のすぐ上から。

「起きろ」

再び声がする。怒りも労わりもない、無機質で透明な音。

「目を、開けられるだろう？」

温もりが、そつと頬に触れた。

目を開ける？

瞳。

瞼。

自分の身体。

それを意識した瞬間、急激に世界が広がった。

ぼんやりと白く曖昧な視界。

そこに一人の青年がいた。

雨に濡れた、暗さを孕む赤銅色の髪。髪よりもさらに暗い闇色の外套が、その青年の全身を覆っている。端正な顔立ちには、声と同

様に感情の色は窺えない。

青年の黒い瞳は、じっと少女を見据えていた。彼女もまた、彼を見つめる。まっすぐに交わる視線の先で、やがて青年の瞳が僅かに揺らいだ。

そのまま視線を逸らした青年は、己の外套を手早く脱いで、膝を折った。

自分はどうかやら、膝を抱えて地面に座り込んでいたようだった。同じ目線の高さになった青年の顔が近づく。頬を掠める青年の髪の毛らかな感触。

それでも、再び視線が交わることはなかった。まるでそれを遮るかのように黒い外套が翻って、彼女の体を包んだのだ。

「このままでは凍死する。死にたくなければ羽織っていることだ」

じわり、と外套から青年の体温が染みこんでくる。それは驚くほどに熱かった。それだけ自分の体が冷え切っていたのだと気づく。見ると、外套の下自分の体は、薄手の白い布を纏っているだけだった。当然、ほとんど素肌は露出している。

「……ありがとう」

無意識に言葉が零れ落ちた。途端に青年は驚いたように目を丸くする。初めて見せる感情。しかし、次の瞬間には、またもとの無表情に戻っていた。

「自分の家の門前で凍死されたら、誰だって気分が悪い」

そう言った青年の視線の先を追うと、そこには、石壁の門がずしりとした重みをもって佇んでいた。門の奥には深い常緑樹の並木道があり、それはどこかこじんまりとした小さな屋敷へと続いていた。

「どうしてこんな場所にいる。行くあてがないのか？」
「行くあて？」

そんなものがあつただろうか、と思う。よくわからない。けれど無性に、なにかを求めているような気もした。胸が張り裂けても、喉が潰れても、それでも構わないくらいに、強く強く、なにかを欲していたような……

「痛い」

じりじりとした痛みが、急速に彼女の胸に広がった。堪えられないほどに深刻なものではないけれど、それがどこから発するものなのか、自分自身にもわからなかった。ただなにかを訴えるかのよう

に、その痛みは彼女を苛む。

「……痛い」

もう一度呟いた瞬間、青年が立ち上がった。

青年を見上げる彼女の視線と、彼女を見下ろす青年の視線が、再び交わる。その合間を、細い糸のような雨が幾つも通り過ぎては、地面に弾けた。

「なにが、痛い」

「わからない。……なにも」

「なにも？ なにも、とは記憶がないということか？」

「記憶？」

問われて、彼女は首を振った。記憶など存在しない。自分の中はどこまでも真白で、まだなににも染まってはいないのだ。

そう、自分はいま、始まったのだから。

「記憶が……ない」

青年は驚いて息を呑み、それから少し考えるように瞳を細めた。

「自分の名前は、わかるか？」

「……ユキ」

考えるよりも先に、唇が動いていた。口にして初めて、それが自分の名前なのだと理解する。

「ユキか。俺はレヴィン。……うちの前で倒れていたのも何かの縁だろう。行くあてがないなら、うちに来るか？」

そう言って差し出された青年——レヴィンの手を見つめ、彼女は考える。

この手を取ることで、変わるものは何だろう。果たしてそれは自分にとって、望ましい変化であるのか。

いずれにしろ、この手を拒むという選択は思いつかなかった。

そっと伸ばした手を、レヴィンの手に重ねる。瞬間、ぎゅっと握り返された手は、預けられた外套と同じく温かった。

青年に手を引かれ、立ち上がって歩き出す。長時間雨に打たれた身体は冷え切りうまく動かない。それを理解していたのか、青年は黙然と、しかし彼女に合わせてゆっくりと歩いてくれていた。

ふと、視線を空に伸ばす。

灰色の曇天からは、細く柔らかな雨が絶えず降り続いていた。

かたちを成すもの＜1＞

零れゆく砂を拾い集めることは無意味だろうか。

けして綺麗な砂ではないとは知っている。

それでも、その砂の一粒がそれぞれに違う質感と色合いを持っていることを知っていて、どうして、諦めることができるというのだろうか。

気がつくとき、ユキは柔らかな布団に包まれていて眠っていた。

彼女一人では泳いでしまいうるような、広々とした豪華な寝台である。真っ白な寝具からはほのかに石鹸の香りがして、その清潔さを物語っていた。

はつきりとしらない頭で、ここはどこだったのだろうかと考える。

のそりと身を起こして布団から這い出ると、とたん、視界が真っ暗になって、ガツン、と大きな音が響いた。

それがベッドの枕元の板に自分の頭をぶつけた音だと彼女が気づいたのは、熱を孕んだ鈍痛に見舞われてからのことだった。

「……………ッ」

声も出せずに頭を抱えて丸まっていると、慌ただしい靴音が近づいてきて扉を開けた。

「失礼いたします。どうされましたっ？」

部屋へと入ってきたのは歳若い娘だった。といっても少女と呼べるほどに幼くはなく、ユキよりは少し年上だと見受けられた。

明るい栗色の髪をきつちりと纏め、簡素な濃紺のワンピースに白いエプロンを着けている。まっすぐに背筋を伸ばして立つその姿は、こざっぱりとして清潔感があつた。

娘の呼びかけに答えようもなく痛みに悶絶するユキを認めるなり、娘は「まあっ」と声を上げて駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？ さっきの音……ぶつけてしまったのですね」

心配そうに眉を寄せた娘の手が、そつと頭に触れてくる。優しく撫でられてほんの少し痛みが和らいだ気がしたユキは、ゆっくりと顔を上げた。

「かわいそうに、痛かったでしょう。こぶになっていますよ。少し冷やしましょうか？」

言って踵を返そうとする娘を、ユキは慌てて制止した。

「大丈夫」

「そうですか？」

なおも気遣わしげな視線を向けてくる娘に、ふと思い出してユキは言った。

「エルマ、さん？」

雨の中で青年——レヴィンの手をとった後、案内された屋敷の中

で紹介されたのがこの娘、エルマだったはずだ。

「まあ、覚えていてくださったのですか？ 嬉しいですね。改めまして、私はエルマと申します。どうぞエルマと呼び捨ててください」

言葉とともに丁寧に礼をされて、慌ててユキも礼を返した。

「えっと、ユキ、です。エルマさ……エルマは、ここで働いている人？」

「はい。この屋敷唯一のメイドにして、影の支配者を自称させていただいております。ご用の向きには、いつでもお気軽にお呼びくださいませ」

「……影のしはいしゃ？」

不可解な単語に思わずユキが聞き返すと、エルマはにっこりと微笑んだ。

「それは、おいおいご理解いただけるかと存じますわ」

含んだような物言いになんだかそれ以上聞いてはならない気がして、ユキは口を閉ざした。

「さあ、お目覚めいただいたのなら朝食の準備をしませんと」

娘の言葉にユキはようやくいまが朝であることに気づいた。

よくよく周囲を見渡してみれば、分厚い高級そうなカーテンの間からは眩しそうな陽の光が僅かに漏れ出している。耳を澄ますと小鳥の囀りも聞こえてきた。爽やかな朝だ。

しかしそんな朝には似つかわしくなく、ユキの体調は爽快とは言

い難かった。

特別具合が悪かったり熱があったりするわけではないのだが、まだ身体が完全に目覚めきっていないかのような、寝起き独特の倦怠感が抜けきらないのだ。

娘の申し出はありがたかったが、これから用意するというのならは無駄にはならないだろうし、できればなにも食べたくはない、と思った。

「あの、私あまり食欲が……」

「だめです」

笑顔のままに、きっぱりと言い切られた。

簡潔に過ぎるその言葉は、その柔らかい響きとは裏腹に奇妙な迫力を持ってユキの鼓膜を震わせた。まるで、反論は許さない、とも言うように。

「だめです。わかりましたか？」

再度、エルマが言う。

それは前言の迫力が嘘だったのではと思えるほどに、優しいものだった。

「……はい」

激流の最中で出会った流木に縋りつくかのような心地で、気がつけば頷いてしまっていた。

「では、私は朝食の支度をしてまいります。お着替えは昨夜のうちに隣の部屋のクローゼットに幾つか用意しておきましたので、ご自由にお選びください。食事の準備が整いましたら呼びにまいります

ので、それまでには必ず身支度をすませておいてくださいね」

言うだけ言うと、「失礼します」と告げてエルマは去っていった。

軽快な靴音が遠ざかった室内で、無意識のうちにユキは息を吐いていた。

未だにぼんやりとしたユキの思考では、テキパキとその場を仕切っていくエルマの勢いに着いていくだけで精一杯だった。少しでも悔しい気もしたが、それ以上に彼女のその凛とした物腰が好ましくも思えた。

そういえば、昨日の彼女の対応も随分と手際のよいものだったことを思い出す。

全身が雨に濡れて冷え切ったユキの様子を見るなり、エルマは問答無用でユキの手を引いて屋敷の中を突き進み、温かい湯が張られた浴槽へと突っ込んだのだった。

やがて冷えた身体が温まった頃に再びエルマがやって来て、後は息を吐く暇もなく、手早くタオルに包まれ髪を乾かされ、服を着せられ、案内されたこの部屋で「お疲れでしょうから今日はお休みください」と言い渡された。

……考えてみると、まるで人形のような扱われようである。

だが、実際昨日の自分はたしかに人形のようなだったとユキは思う。

そして、昨日の自分を人形のようにだと感じる今日の自分は、昨日よりも少しだけ、ほんの少しだけではあるが、人間的になっているような気がした。

かたちを成すもの<2>

小さな執務室で一人、彼は机に向かっていた。

このこぢんまりとした屋敷には相応しい、狭く簡素な部屋である。とはいえ室内にあつらえられた幾つかの調度はどれも値の貼る重厚なものばかりであった。

しかしそうにも関わらず、ほとんど必要最低限のものしか置かれていないためか、この小さな空間は、見る者にどこか寒々しい印象を与えるものだった。

もっとも、好んでこの部屋を作り出した部屋の主にとっては心地いい空間であるのだろう。

彼は、先ほどからだだ黙々と机に向かい手を動かし続けていた。静かな室内で、目の粗いざらついた羊皮紙の上をペンが走っていく独特の音だけが小さく響いている。

まだ新しい流暢な筆跡は、粗悪な紙質のせいか所々にインクのむらを残して紺色に光っている。

そう大きくもない羊皮紙をびっしりと文字で埋めたところで、彼は手を止めた。

「お茶にいたしませんか？」

いつの間に部屋に入っていたのか、狙っていたとしか思えない絶妙なタイミングで背後からもたらされた提案に、彼――レヴィンは溜息を吐いた。

「まだ始めたばかりだぞ」

「今日は、そうでしょうね。けれど昨夜も遅くまで続けていらしたでしょう？」
いくらレヴィンさまでも、このあたりで小休止なさら

なければ作業の能率が下がりますよ」

慇懃な口調でありながらも物怖じせずにはずけずけと投げかけられる言葉に、彼は内心で苦笑した。この屋敷で彼にこんな言葉を吐けるのは、ただ一人だけだ。

「エルマ。おまえを言い負かせる日はいつだろうな」

「あら。私は自分がレヴィンさまに勝っているなどとおこがましい錯覚を覚えたことは一度もございませんよ？」

白々しい口調に意地をはるのも馬鹿らしくなって席を立つ。

振り返ると、案の定、扉の前に立っていたエルマは聞き分けの良い幼子を見るような慈愛溢れる生暖かい眼差しでこちらを見ていた。

「弟に泣きつかれたか」

メイド服を身に纏った娘は、クスリと笑った。

「ゼルマはレヴィンさまに深く傾倒していますから。レヴィンさまがご無理をなさると、ゼルマまで不安定になってしまいます。どうか私の可愛い片割れをあまり困らせないであげてくださいな」

するすると口をつく言葉は、聞く限りでは随分と麗しい姉弟愛にも思えるが、その実エルマが楽しんでいることを、彼は知っていた。この一見人の良さそうなメイドは、昔から自分の気に入った人間——特に弟の困った顔を見るのが嬉しくて仕方がないのだ。

「頼むから、客人にはその歪んだ愛情を示してくれるなよ」

「ユキさまですか。ふふ、お熱いですね」

「……………」

レヴィンは深い眩暈を感じて額を押さえた。

「……何を勘繰っている。残念だがおまえの想像しているような意図はない」

「想像？ まあ、何をですが？ 私はまだ何も言っていないませんが」

わざとらしくそう言って主を見るメイドの顔には、にこやかな笑みが浮かんでいた。

眩暈がなお一層に強くなっていくのを感じながら、レヴィンは今更ながら彼女が歪んだ愛情を示す対象には自分も含まれていたことを思い出す。

「……エルマ」

メイドを見つめる自分の顔が彼女の望みどおりの困り顔になってしまっていることを自覚しながら、それでもレヴィンは継るように彼女を見つめる。

主とメイドという関係の一方、幼い頃からの付き合いでもあるエルマに対し、どれだけ努力したところで結局は適わないことを、彼は痛いほどにそれこそ身を持って理解していた。

「大丈夫ですわ、レヴィンさま」

エルマは、限りなく優しくそう言った。

「僭越ながら、幼い頃からお世話させて頂いているレヴィンさまのことを、私は弟のように思っているのです。そのレヴィンさまに対し、私が困らせるようなことをすると思いますか？」

とっさに出かかった、いまこの瞬間しているだろうが、という言葉
葉をレヴィンは賢明にも飲み込んだ。

「では、もうそつとしておいてくれ」

心の底からそう思った。

たんにからかっているだけなのか、本当に誤解をしているのか。
高確率で前者であろうことはわかっているが、釘を刺しておかない
ことには後々どんな事態を招くか気が気ではない。

固唾を吞んでエルマの反応を窺っていると、不意に扉をノックす
る音が響いた。

「ゼルマか？ 入れ」

「はい。失礼いたします」

応じて入室してきたのは、執事服を身に纏った長身の青年だった。
先ほど話に出ていた、エルマの片割れのゼルマである。男女の差
異はあれど、さすがに双子だけあって面差しは似通っている。大き
な違いは、エルマが常にこやかに笑んでいるのに対し、ゼルマは
終始どこかぼんやりと眠たそうな顔をしていることだ。

「ゼルマ、どうした？」

レヴィンが問うと、ゼルマはその眠たそうなとろんとした瞳を姉
に向けた。

「姉さんに呼ばれたのですが」

「ゼルマ。お姉ちゃんの言いつけは守れたのでしょうか？」

「はい。準備はすべて整いました」

「なんだ？ その準備というのは」

「姉さんが、本日の昼食は庭でと。レヴィンさまのご休息も兼ねて、ユキさまとゆっくりとお話する機会を設けるために」

淡々としたゼルマの説明にレヴィンは驚いてエルマを見る。

エルマは弟の右腕に自分の両腕を絡めながらこれ以上ないほど楽しそうに微笑んだ。

「レヴィンさまの働きすぎを心配する弟と、主の淡い想いの両方を一度に解決する一石二鳥の策ですわ」

「……だそうです」

同じ色をした楽しい瞳と眠たそうな瞳に一度に見据えられ、レヴィンは今日一番の強い眩暈に襲われた。

かたちを成すもの＜3＞

アルフレート・フレイグルという人間を語る上で、人々の口に入る言葉とは詰まるところ次のようなものだろう。

国内屈指の名門貴族フレイグル家の跡取り息子、若干26歳にして王佐の地位に登りつめた男、国王陛下のお気に入り、眉目秀麗にして頭脳は明晰、少々真面目すぎて融通のきかない嫌いもあるが、総じて将来有望な好青年。

賞賛と憧憬、時には羨望と嫉妬とともに語られるその言葉は、アルフレート自身自覚するところであり、それなりに気に入っていてもいた。

たしかに自分は生まれも資質も人よりほんの少しだけ恵まれている。馬鹿が付くほど生真面目でそれゆえに柔軟さを失うことも否定はできない。

だが、重要なのはそんなことではない。

そんな自分でもなお――いや、そんな自分だからこそ、いまこうしてこの場に立つことが許されている。

それこそが、アルフレート・フレイグルが抱くもっとも重要な己の存在意義であった。

「今年のクインシールは、随分と良質な塩が採れるそうだね」

穏やかなその声に、アルフレートは首肯した。

湯気をたてる茶器の置かれたテーブルを挟んで、向かい側にその人は座している。

熟練した職人が丹精して作り上げたかのような、繊細な輪郭。陶器のように白く滑らかな肌は、うら若き女性も羨むほどだ。

程よく華美に過ぎない上質の衣を纏うその人は、代々の王家の血脈を確かに受け継いだ金色の髪と碧玉の瞳を持っていた。

プリシピア王国現国王、エイリック・ジア・プリシピア。

王佐たるアルフレートが仕えるただ一人の存在。

光栄にも、アルフレートは政務の間の貴重な休憩時間である王のティータイムに同席することを許されていた。

それは公私に渡り彼が王の信頼を得ていることを意味する。

初めて王のティータイムに呼ばれたとき、アルフレートは改めてエイリックへの尊崇の念を深め、万が一の有事の際には命に懸けても最期まで王の傍らを離れまい、と強く誓ったのだった。

「今年は氣候に恵まれましたから。いま商都クインシールは一段と賑っていると聞きます」

「商都か。最後にあの場所を訪れたのは即位する何年前だったかな……。様々な品と商人たちが行き交う活気のある街だったね」

カップに唇を寄せながら思いをはせるように目を細めるエイリックに、アルフレートは面には出さずに嘆息した。

商都クインシールは、このプリシピア王国における商業の中心地である。

その歴史は古く、まだ貨幣制度も普及していなかった時代にまで遡る。

当時は多くの物品は塩によって取り引きされていたために、豊富な岩塩資源を抱えるクインシールはこの国でもっとも豊かな土地であったといわれている。

豊かさに引き寄せられるように集まった人々が街を作り、そんな人々を目当てに様々な物品を持ち込んだ商人たちがその街を商都と呼ばれるまでにした。

プリシピアに生きる者ならば必ずは耳にする華やかな街の名、クインシール。

けれど目の前にいるこの人は、他でもないこの国をその手中に治めるプリシピアの国王は、最後にその街を訪れたのは即位前だと言う。

アルフレートが王佐の地位に就いたのが6年前。

それはエイリックが即位してから約三年後のことであるから、最低でも9年以上もの間、エイリックはクインシールに行っていないのだ。

いや、クインシールだけではない。

公式訪問で訪れる近隣の神殿を除けば、エイリックはこの9年間ほとんどどの土地にも行くこともなくこの王城の中にいた。

「陛下……」

何を言えばいいのかもわからずただ困惑するアルフレートに、エイリックは静かに微笑んだ。

「今年の花祭りは、かつてない賑やかなものに、なるだろうね」

花祭りとは、商都クインシールで行われる盛大な祭りのことである。

商人の都だけにその日は普段以上に様々な店や品が並び、たくさんの催しが行われる。

その華やかな祭りには、遠く離れた地に住む者であっても一度は

足を運んでみたいと思うだろう。

「陛下。もし、陛下が望まれるのでしたら……」

もし彼がたった一言、外へ出たいと言ってくれるなら――

「アルフレート」

「はい」

「一つ、お願いを聞いてもらいたいのだけど、いいかな」

アルフレートはごくろ、と唾を飲んだ。

「なんなりと。お申し付けください」

たとえそれがどのような望みであったとしても。そう心中で付け加える。

自分はエイリック・ジア・プリシピアという一人の人間に仕えているのであって、決してプリシピア国王というただの象徴を盲目的に崇拝しているわけではない。

「ありがとう。君には、いつもわがままを言っただけだ」

「いいえ。私は、わがままだとは思っていません。むしろ陛下は、もっと尊大であらせられるべきかと」

アルフレートは真剣にそう言った。

しかしエイリックは驚いたように目を丸くした後、冗談だと思ったのだろう、クスリと子どものように笑みを漏らした。

「ふふ……なら、遠慮せずに言っしまおうか。会いたい人が、いるんだ」

「それは――？」

「ティシャル公爵から書状が届いた。先日、一人の少女を保護したそうだ。少女の名は、ユキという」

「ティシャル公爵、ですか……」

レヴィン・トワ・ティシャル。ティシャル公爵家一代目当主。この国で唯一、領地を持たずに公爵の地位にある者。

正直、アルフレートは彼の名を耳にするたびに罪悪感で胸がざわめくのだ。

「陛下が会いたいというのは、その方ですか」

エイリックは静かに、しかし決然と言った。

「アルフレート。僕は、その少女に会ってみたいんだ」

かたちを成すもの＜4＞

「本日の昼食はお庭で頂きましょう。今日はお天気が良くて暖かいし、きつと楽しいですよ。レヴィンさまもご一緒なさいますから」

エルマがそう言ったのは、ユキがこの屋敷で暮らし始めてから三日が経った日の朝のことだった。

三日という期間は、短いようでそれなりに長い。

人が新しい生活環境へ順応し始めるには充分な期間のようで、気のすまない朝食を断ることが不可能であると悟ったユキは、半分以上閉じかかった目をしたままではあるが、それでも黙々と朝食を口に運んでいた。

さすがと言うべきか、エルマはこの三日で寝起きの悪いユキへの対応をすっかりと心得ていた。

起きぬけがもっとも食欲のないユキに、時間を置いて朝食を食べられるようと、少し早めに起こしてくれる。

朝食の内容も、二日目からはほとんど食欲のない彼女でもなんとか食べられるよう配慮されたものになっていた。

ユキは口の中の物をゆっくりと咀嚼して飲み込んでから、口を開いた。

「……エルマ、嬉しそう」

「はい。それはもう。主の意に沿うことこそが使用人の喜びですから」

朗らかに微笑んだエルマはまさに使用人の鑑のようだった。

「一緒に昼を食べようと言ったのは、レヴィン？」

「いいえ。計画したのは私と弟ですが、レヴィンさまは大層お喜びの様子でしたよ」

「……そうなの？」

ユキは首を傾げた。

レヴィンが喜ぶ様子というのがあまり想像できない。

そもそもユキはこの三日、レヴィンには一度も会っていなかった。同じ屋敷にいるのに一度も顔を合わさないというのもおかしい話だが、レヴィンがユキの様子を見に来ることはなかったし、ユキも特別レヴィンのことを口にすることはなかった。

エルマからはレヴィンが仕事をしていると聞いていたため、会いに行くのも邪魔になるのではないかと考えていたのだ。

ユキにとって、レヴィンは最初に出会ったその日の印象でしか語れない。

無愛想で、ほとんどが無表情。そのくせ冷淡ではなく、雨に濡れたユキの身体を気遣い、そのうえ素性も明らかでない彼女を屋敷に置いてくれた——言ってみれば少々お人好し。

「エルマ。レヴィンって、どんな人？」

「レヴィンさま、ですか」

ユキの唐突な質問に、しかしエルマは驚かず考えるように瞳を伏せた。一呼吸の間をおいて、瞳を開きユキを見つめる。

「意地悪を申しているつもりはありませんが……私が知るレヴィンさまの姿は、あくまで一介の使用人という立場においての私個人が

持つ印象でしかありません。ユキさまには、ユキさまご自身の視点でレヴィンさまを見てさしあげて欲しいのです。いまはわからなくても、きつとレヴィンさまを知っていく機会はこの先たくさんありますから」

ゆっくりとそう言ったエルマの瞳には、優しい色が広がっていた。一介の使用人、と彼女は言ったが、見守るようなその瞳に、ユキは確かにエルマが血の通った存在と同様にレヴィンを思っているのを感じた。

「わかった」

短く答えたユキに、エルマは「ありがとうございます」と深々と頭を下げた。

再び黙々と朝食を口に運びながら、ユキは考える。

これで一つ、レヴィンについてわかったことがある。

レヴィンは、エルマにとってとても大切な人間だということ。言い換えれば、大切だと思うに足る人物であるということだ。

昼時になりユキがエルマに伴われて庭に出ると、レヴィンはすでに席に着いていた。

傍らには、この三日間で何度か姿を見かけたことのあるエルマの弟――ゼルマが立っている。

「どうぞ。そちらに」

眠たそうな瞳を向けてゼルマが勧めてきたのはレヴィンのちょうど向かいの席だった。

言われるままにユキが席に着くと、エルマは至極満足げな笑みを浮かべる。

「さあ。お二人とも、目一杯楽しんでくださいね」

エルマの言葉を合図に、ささやかな昼食会が始まった。

清潔そうな白いクロスが掛けられたテーブルには、エルマお手製の料理が幾つも並んでいる。

緑が瑞々しいグリーンサラダに、野菜や肉をたっぷり挟んだサンドウィッチ、取りやすいよう薄くスライスされたローストビーフ、色とりどりのフルーツに、甘い香りを放つ焼き菓子。

何から味わおうかとユキが目移りさせていると、ゼルマがカップに紅茶を注いでくれた。

「ありがとう」

そう言って微笑んだユキに、ゼルマは優雅に一礼してみせる。

そのままティーポットを置こうと彼が小型のワゴンへ向かった瞬間、背後からにゅっと伸びたエルマの白い手が彼の襟首を掴んで思い切り引っ張った。

「わっ」と声を上げてバランスを崩すゼルマを、エルマは危なげもなくもう一方の手で支える。

まるで母親が幼児を扱うような動作だが、女性の中でも比較的体格の小さいエルマが、痩身とはいえ背の高いゼルマに対して行うと喜劇を見ているかのような微妙な違和感が付き纏う。

「姉さ……陶器を持っているときに急に引っ張るのは、」

「さあゼルマ。そろそろババロアが出来ている頃です。盛り付けを手伝ってください」

自分の抗議をまるつきり無視したエルマの言葉に、ゼルマは慣れているのか気分を害した様子もなく、けれど不思議そうに瞳を瞬かせた。

「ババロアなら、いつも一人で盛り付けているのでは？」

「ゼルマ。お姉ちゃんのお願いが聞けないのですか」

お願いというよりはむしろ脅迫のような口調であったが、ゼルマはのんびりと「はあ……別に構いませんが」と言っただけで、今度こそティールポットをワゴンに置くと、屋敷へと歩いていく。

「ユキさま、どうぞたくさん召し上がってくださいね。……では、レヴィンさま。ごゆっくり」

エルマは啞然とするユキとレヴィンへ交互に視線と満面の笑顔を向けると、弟を追いかけるように足早に去っていった。

何だかよく状況が飲み込めずに首を傾げるユキの向かいで、レヴィンが酷く疲れたように深い溜息を吐いた。

かたちを成すもの<5>

まったく、エルマの暴走ときたら制止のしようがない。

レヴィンは溜息とともに胸中でそう零した。

それでも、どうにも逆らうことはできないとわかっているのだから、諦めるより他はないのだ、とも思う。

主であるはずの自分でさえこうなのだから、ゼルマにいたっては逆らうという概念自体存在しないだろう。

本人の自称する通り、エルマはこの屋敷で最強の存在なのである。

それにしてもこの分では、自分とまったく顔を合わせなかった三日の間に、何も知らないユキに対しエルマは喜々としてあることないことを吹き込んだのではないだろうか。

「エルマは、」

さて、何と言ったものだろう。

上手く聞き出す言葉が思いつかず中途半端に話を切り出すと、先ほどのエルマの行動に驚いてきょとんとしていたユキがこちらに視線を向けた。

まっすぐに自分を見つめる黒い瞳を、意識したその瞬間、反射的に視線を伏せる。そうしてから、それが不自然ではなかったかと少し不安になった。

ちらりと視線を戻すと、ユキはレヴィンの内心の葛藤など少しも思い至らない様子でじっと自分を見つめていた。

ほっ、と彼女にはわからないよう小さく息を吐く。

レヴィンは、ユキの瞳が苦手だった。

それは出会ったときから感じていたことで、このどこまでも歪みのない瞳に見据えられると自分の中の何か脆い部分を見透かされてしまいそうで、どうしても彼女と視線を合わせることができないのだ。

「……エルマは、俺のことを何か話していたか？」

彼女の視線を意識すると、思考が円滑に働いてくれない。結局こんな回りくどい質問しか浮かばなかった。

それでもおそらく聞きたい情報はわかるだろう、となんとか自分を鼓舞する。

「エルマは、何も言っていないよ」

「何も？」

レヴィンは思わず聞き返した。

たしかに愉快犯よろしく脚色過多なエピソードを吹き込まれるのは本意ではないが、三日もの間に一度も自分の話が出なかったというのも少々物悲しい気がした。

この三日間、自分は一度もこの少女の気に留まりはしなかったということか。そう考えれば、ユキがこの三日間自分とまったく会おうとはしなかったのも理解できる。

エルマにはユキが会いたいと言ったら知らせるようにと伝えていたため、連絡が来ないのいいことにレヴィンはすっかり仕事に没頭していたのだが。

「ユキは、この三日、何をしていた？」

「ぼうっとしてた」

複雑な思いを集約したレヴィンの探りは、恐ろしく率直な一言で瞬時に返り討ちにされた。

「……そうか」

脱力しかけるのを堪えながら適当な相槌を打つと、ユキはそれで話が終わったと思ったのか、目の前に並ぶエルマの手料理へと興味を移した。

何から食べようかと逡巡しているのか、視線が落ち着きなく皿の上を彷徨っている。会話よりも食欲か、とレヴィンは小さく苦笑した。

「取ってやろうか」

何気なくそう告げると、ユキは素直に皿を差し出してきた。その幼く無防備な動作に妹がいたのならこんな感じなのだろうか、と思う。

幾つかの皿から適当に盛り付けて渡してやると、ユキは嬉しそうに礼を言った。

短い間に随分と人間らしくなったようだ。いや、人間らしい、というのは失礼だろうか。

あの日、雨の中で出会った少女は、あまりに無垢で、あまりに、純粹だった。

まるでいまこの瞬間生まれたばかりの嬰兒だともいうように、真っ白な空気を纏っていた。

彼女には、自分の家の前で凍死されては寝覚めが悪い、と言ったが、それは単なる言い訳に過ぎない。実のところは、明確で理路的な理由などほとんどないに等しい。

ただ何となく、感じたのだ。

この真っ白な少女をこのままこの世界に一人で置き去りにするのは、危うい、と。

だから手を伸ばした。

だから、彼女に手を差し伸べた。

そして自分はその判断を間違っていたとは思わない。思わないことに決めている。

それは、たとえこの先彼女が自分の何を知り、どう行動しようとも、である。

「レヴィン？」

「なんだ」

未だ思考の波に半分漂いながら応える。

「エルマは、自分がレヴィンについて話すことで私にあなたに対する偏った先入観を与えなくなかったんだと、思う。実際、似たようなことを言っていたし」

一瞬、ユキの言葉を理解しかねてレヴィンは硬直した。

いや、ユキの言葉、というよりも、その言葉を発したのがユキである、ということの方に認識が追いつかなかった。

なんだか、随分と長い科白だったような気がするが、とぼんやりと思う。

改めて見つめた少女は、やはりごく平凡で、少しだけ幼い印象を感じる。

しかし、それだけだ。どうしても、先ほどの冷静で大人びた言葉を発した本人だとは思えない。

「ユキ、」

「うん？」

呼ばれて、ユキは食事の手を止める。

レヴィンの言葉を促すように少しだけ首を傾げる少女は、先ほどの自分の発言に少しの疑問も抱いてはいなかった。

この少女の中では、幼すぎる言動も大人びた思考も、ごく自然に同居するものらしい。

「……いや、何でもない」

気にするな、というように瞳を伏せると、ユキは一瞬不思議そうにレヴィンを見つめ、しかしそれ以上の追求をしようとはしなかった。

再び皿の上に視線を戻すと、エルマの手料理を小さな口に次々と運んでいく。

時々美味しい、と言っでは無邪気に笑みを見せる少女に相槌を打ちながら、気がつけばレヴィン自身、いつも以上に食が進んでいるようだった。

ゆっくりと、穏やかに流れていく時間。

暖かな団欒、というものにはあまり縁がなく育ってきたレヴィンだが、このような食事も正直——不快では、なかった。

かたちを成すもの<6>

門前には、見張りの一人もいなかった。

どこか見えないところにでも潜んでいるのか、あるいは仕事をサボりそこらに座り込んでいるのか、そんな一縷の望みをもって——そんなことに望みをかけたくもないのだが——周囲を窺うが、それらしい気配は全く見当たらない。

本当に、誰一人いないのだと悟ったとき、アルフレート・フレイグルは自分のせいでもないのに物凄く罪悪感を覚えた。

頑強な、けれども少々時代を感じさせる痛んだ石壁の門の前で、アルフレートは一人溜息を吐く。

たとえばどう鼻屑目に見ても弱小貴族のちっぽけな屋敷にしか見えないが、それでも門番を立てないなど、軽率にもほどがある。

幸いにも、この王都における近年の治安状況は向上しているといえるが、だからといって門を無人のまま晒しておくなどと……

「嘆かわしい。仮にも公爵の位にある方の屋敷を、こんなにも無防備に……」

「何か、ご不満でもございましたか」

突然の言葉に、アルフレートは思わず数歩退いた。

驚きのままにまじまじと見つめたその人物は、一部の警戒色も窺えない眠たそうな瞳でぼんやりと彼を見つめている。

「驚いた。なんだ、やはり人がいたのか」

ほっとして思わず苦笑したアルフレートに、その人物——この屋敷に仕えているらしき長身の青年は、不審そうに、というよりも本

当に不思議そうに少しの警戒も滲まない表情で小首を傾げた。

「当館に、何か御用でしょうか」

身長は高くともどこかひよろりとした頼りない体型、加えてあまりにも無防備というか、疑うことを知らない幼子のような危うさを持った青年にアルフレートは一瞬、本気で「本当に大丈夫なのか、この館はっ」と叫びたい気分になったが、そこは面に出さずにつこりと笑いながら、もともと正しい姿勢をさらに正した。

「私はアルフレート・フレイグル。若輩ながら王佐の地位を賜っております。この度は非公式ながら、陛下よりのご下命でもって参上いたしました。ティシャル公爵にお取り次ぎ願いたい」

「さようで。では、どうぞお入りください」

「……はい、ありがとうございます」

納得したようにあっさりと案内をしてくれる青年にアルフレートはやはり色々と思うところがあつたのだが、こうした全体的な危機感の薄さへの警告は屋敷の主であるティシャル公爵にするのが最も効率的であろうと己に言い聞かせ、ともすれば飛び出しそうになる説教まがいの台詞の数々をぐっと堪えた。

前方を歩く青年は、まさか自分の背後でアルフレートがそんな葛藤を必死にしているとは思ひもしないだろう。どこかのんびりとした歩調で進むものだから、さほど広い敷地とはいえないのに未だ屋敷内にも入ってはいない。

というか、そもそも本当にこんな屋敷の中に仮にも公爵である人がいるというのだろうか。

アルフレートがそんなもつともといえbaumもつともな疑念に駆られ始めたとき、青年がくると振り返り「あちらです」と告げてきた。

「あちら……?」

青年の視線をやる方を追うと、少し離れた場所で、確かにティシヤール公爵と思しき青年と一人の少女がテーブルを挟んで何やら言葉交わしているようだった。

どうやら、外での昼食を楽しんでいる時だったらしい。

「これは、失礼しました。食事時は避けたつもりでしたが昼食の最中だったんですね。この度は陛下のご下命とはいえ、ごく個人的な用件と窺っております。そう急ぐわけでもありませんので、よろしければ別室にて待たせて頂きたい」

「いえ、」

「そのようなことに気を遣って頂く必要はありませんわ。たとえばのような御用向きでありましょうと陛下のご下命とあらば、我が主は時を選んだりはいたしません」

アルフレートの言葉に口を開いた青年を遮るように、背後から意思のはっきりとした女性の声が響いた。

アルフレートが振り返る必要もなく、女性はつかつかと勢いよくアルフレートの正面まで進むと、優雅に一礼した。

「王佐、アルフレート・フレイグル様とお見受けいたします。ようこそ当館へ。私はこの屋敷に仕えておりますエルマと申します。こちらは、弟のゼルマ。僭越ながら、フレイグル様のご用件はお聞かせ頂きました。ただ今主に取り次ぎますので、こちらで少々お待ちくださいませ」

「……はい、」

唐突に現れ颯爽と場を仕切りだしたエルマに、アルフレートは半

ば呆然とするばかりだった。

姉弟と言っていたが、おそらくは双子なのだろう。顔立ちそのものは驚くほどよく似ていた。

だが、性別の差よりも何よりも、気質の差がこの二人の違いをはっきりと決定付けている。

ゼルマが静であるならばエルマは動。

アルフレートに対し弟が名前さえ名乗ってなかったことを察してすかさずフォローしている辺りが、なんとも抜け目ない。

ちらりとゼルマの方へ目をやれば、そんな姉の様子に慣れているのか、去っていくエルマの後姿を眠たそうに平然と見守っている。……このやりとりだけで、この二人のこれまでの関係がはっきりとわかるな、とアルフレートは浮かびそうになった苦笑を心のうちに留めた。

「それにしても、君のお姉さんはどうして私がアルフレート・フレイグルだとわかったのでしょうか？」

一介の屋敷付きの使用人と王佐であるアルフレートが顔を合わす機会など、まずありえない。

彼がティシャル公爵の屋敷を訪ねるのはこれが初めてのこと。

彼女は以前に王宮で働いていたことでもあるのだろうか？

アルフレートの何気ない疑問に、一瞬理解しかねるように数度瞬きをしたゼルマは、ああそんなことか、というふうに気の抜けた抑揚のない声で言った。

「姉さんは地獄耳なので……門の辺りで人の足音がするから僕に様子を見て来いと。ですから、フレイグル様が最初に名乗られたのもすっかり聞こえていたのだと思います——厨房から」

「……………」

なるほど、屋敷の中から人が近づいてくる足音が聞こえるのなら、確かに門番は必要なのかもしれない。

動揺する思考の片隅で、アルフレートはそんなことを考えながら、今度こそ苦笑を隠せなかった。

かたちを成すもの<7>

ティシャル公爵のもとから戻って来たエルマは、アルフレート
を屋敷の中の一室へと案内してくれた。

テーブルを挟むように両側にソファの配置された応接室らしいそ
の部屋は、質素ながらも充分に手入れが行き届いていた。

どうやらこの屋敷は外から見るほどに荒れているわけではないよ
うで、ここまで案内されながら見ていた限りでは、古びてはいても
それなりに暮らしやすそうな環境であった。

「申し訳ございませんが、こちらで少々お待ちくださいませ。主と
ユキ様はすぐにいらっしゃいますので」

やはり、というか、アルフレートの突然の訪問は、彼らの昼食の
中断させることになってしまったらしい。

「こちらこそ申し訳ありません。食事のお邪魔をするつもりはなか
ったのですが……」

勧められるままに席に着いたアルフレートが言うと、エルマはに
っこりと上品に微笑んだ。

「先ほども申し上げましたが、国王陛下のご下命以上に大切なもの
などありませんわ。もとより、昼食時から外れた時間でございま
した。フレイグルさまにそのような意図がなかったことなど、我が
主は了解しております。それより、随分と寂しい屋敷で驚かせてし
まったのではないでしょうか」

エルマはさりげなく話題を逸らしてくれたようだった。

「寂しい、とは思いませんでしたが……門番がいないことには驚きました。この屋敷には何人の方が勤めていらっしゃるのですか？」

「お仕えさせていただいているのは、私と弟だけです。我が主は賑やかな暮らしを好みませんので。現在この屋敷には、主の他には私たち二人と、お客人であるユキさましかいらっしゃいません」

「そう、なのですか。あの、立ち入ったことかもしれませんが、ユキさまはどのようなお方でしょうか」

「可愛らしいお方ですわ。真っ白な雪のように、まだ何色にも染まっていらない。生まれたての赤子のように無垢な方。ユキさまがどうかいたしましたか？」

「ええ。私が今回こちらをお邪魔したのは、ユキさまに関してのことなのです」

エルマは聡明な光を帯びた瞳を、僅かに眇めた。

「それは……私がいま尋ねるべき話ではないようですね」

使用人である分をよく弁えた判断だった。アルフレートは微笑む。

「陛下は他言無用に、とはおっしゃいませでした。ティシャル公がお許しになるのであれば、貴女もご同席なさるといい」

この屋敷に二人しか使用人がいないというなら、この二人にとっても決して無関係な話ではないだろう。

どうせ後から聞かされるならばこの場において特に問題はない。

「差支えがなければ、お言葉に甘えさせて頂きますわ。……フレイグルさま、大変お待たせいたしました。主が来たようです」

彼女がそう告げた直後、扉を叩く音が室内に響いた。

ゼルマを伴い入室してきたその青年は、アルフレートと視線が合うと緩やかに微笑んだ。友好を示すためだけの儀礼的な笑みだった。

「レヴィン・トワ・ティシャルだ。現在は公爵の位を頂いている。お待たせしてしまったこと、申し訳ない」

丁寧な挨拶は、礼儀には適っていてもどこか冷然とした印象を受けてしまう。

ティシャル公は顔立ちこそ端正であるが、他の者を遠ざけるような冷たい空気を纏っているようにアルフレートには思えた。

それは、美しい者が持つ独特の近寄りがたさとはまた違うものだ。アルフレートの主であるエイリックもそれは美しい若者であるが、これほどまでに近寄りがたい雰囲気を持ってはいない。

誰も近づけたくはないのか。あるいは、アルフレートだから遠ざけたいのか。

ティシャル公の持つ近寄りがたさは、不用意に距離を詰めれば相手が傷つくことも厭わず全力で拒んできそうな、そんな危うさを孕んだ拒絶にあるのではないだろうか。

弄ぶように脳裏で転がしていた無意味な思考は、次の瞬間に半分だけ綺麗に払拭された。

ティシャル公――レヴィンの背後から一人の少女がひよこつと顔を出した途端、彼の持つ近寄りがたい雰囲気、ふっ、と潮が引くように緩んだのだ。

「こちらは、ユキ。数日前から当館に滞在している。原因は不明だが、記憶をなくしているようで素性はわからない。ユキ、ご挨拶を」
「こんにちは」

促された少女は素直に頷いてアルフレートへ向けぺこりと頭を下げた。

黒い髪と瞳を持つ小柄なその少女は、なるほどエルマが言っていた通り、無垢で少し幼く感じられる。

ちらりとレヴィンに視線をやって「偉い人なの？」とこっそり聞いているさまは本当に小さな子どものようだ。

「初めまして、アルフレート・フレイグルと申します。国王陛下より王佐の位を賜っておりますが、それほど偉い人ではありませんよ」

アルフレートがにっこりと微笑むと、少女もまた応えるようににはにかんだ笑みを見せてくれた。

レヴィンはそんな二人のやりとりを一瞥すると、微かに眉間を狭める。どうやら彼にとっての遠ざけたい存在の中にこの少女は入っていないようだ。

「座ろう。ユキ、隣に」

少女を隣に、アルフレートの対面へレヴィンが腰を下ろす。

その様子を計ったかのように、いつのまにか退室していたエルマがお茶の用意をして戻って来た。甘い芳香を含んだ柔らかな湯気を放つ紅茶が三人に行き渡るのを待って、レヴィンは口を開いた。

「ご用件を伺おう。察するに先日陛下へ送った書状について、だなの？」

「はい。私はその書状を直接拝読してはおりませんが、陛下はそれに興味を示されたようで、是非一度、そちらのお嬢さんにお会いしたいということでした」

アルフレートの言葉に納得したように頷いたレヴィンは、隣に座る少女を見やった。

「……ということらしい。ユキ、どうする？」

かたちを成すもの<8>

どうする、と問われたこと自体がユキにとっては不思議であった。

「陛下って、国王陛下のことでしょ？ 私 meaning を聞く必要があるの？」

国王の命令なのだ、断れるはずもない。

仮にユキが会いたくはないと思っただとしても、それにどんな意味があるというのか。

「もつともな意見だが、今回の件に関しては問題ない。公式でない要望を拒否する権利が公爵には与えられている。ユキが望まないのであれば断ることも可能だ」

当然のことのようにレヴィンは言うが、ユキにはそれがどういうことなのか理解できない。

そもそも、レヴィンが公爵であるということも、先ほどのアルフレートへの挨拶で初めて知ったのだ。

エルマやゼルマが敬語を使っていることから身分のある人なのだな、ということくらいは認識していたが、公爵、という地位がどれほど高いものなのかもユキにはわからない。

だが、それほど偉くはないと微笑んでいたアルフレートの就く王佐という地位が、高いものであることは彼女にも想像がつく。

王佐、国王の補佐をする役目を任されているのだ、地位が低いわけがない。

となれば、そのアルフレートに対し丁寧ではあってもへりくだった様子のないレヴィンとは、実は相当に身分高い人なのだろうか？

「……随分と悩んでいるようだな。困っているのなら、保留にしておいていただくか？」

一向に口を開かないユキを助けるようにレヴィンが問う。
アルフレートもまた、控えめに頷いた。

「無理にいま決めていただく必要はないですよ。記憶をなくされたばかりの方に無体を言うような陛下ではありません。私が陛下から受けたご命令は陛下のご意思をお伝えすることでしたので、もう済みました。答えの方はゆっくりと考えられてからで問題はありませんから」

「……どうして、国王陛下が私に会いたいのか？」

一番の疑問はそれだった。

一国の主が一介の娘に過ぎないユキに会いたいと思う理由。

レヴィンが国王陛下に送ったという書状にはどんなことが書いてあったというのか。

アルフレートは少し困ったように苦笑した。

「それもまたもつともなご意見ですが、私にはお答えしかねます。意地悪を言うようで申しわけありませんが、直接陛下にお聞きになるのが一番正確で間違いないでしょう。ですが、これだけは自信を持って申し上げられます。ユキさまが陛下とお会いになることで、利益を得ることはあったとしても不利益を被ることはありません。王佐、アルフレート・フレイグルの名に懸けて保障いたします」

安心させるように優しい声でそう言われて、ユキはますます困惑するしかなかった。

ここまで言ってもらっては了承する以外ないのではないだろうか。ここで断ってしまつては、まるでアルフレートの言葉を疑っているようだ。

レヴィンはどう思っているのだろうと表情を窺うと、ばつちりと視線があつてしまった。

少し驚いて瞬きを繰り返すと、呆れたように溜息を吐かれた。

「人の顔色を窺うな。ユキがどんな答えを出そうと、俺もフレイグル殿も気分を害したりはしない」

レヴィンの言葉に、アルフレートは思つてもみたなかつたというように、驚いた顔をしてユキを見た。

「ティシャル公のおっしゃる通りです。先ほどの言葉はそのようなつもりで口にしたわけではありません。誤解をさせてしまったのなら申しわけありませんが、どうかユキさまご自身の意思で決めてください」

二人に揃つてそこまで言ってもらえば、ユキの口にする答えは決まっていた。

「会う」

当然の答えだ。

会わなければわからないのなら会うまで。それで不利益を被らないと保障してもらえるのならなおさらだ。

唯一気になっていたのはレヴィンがどう思っているのかだが、気にする必要がないと当人から言われた以上、気にするべきではない

のだろう。

……たとえば、その顔色がほんの少し優れないように感じられたとしても。

「かしこまりました。帰参し次第、その旨陛下にはお伝えしておきます。日程に關しましては後日書状で問う形になるかと思います。当日は、ティシャル公とご一緒においでくださいませ」

「……はい」

答えるユキに、アルフレートは安心したようにほっと息をついた。その様子を見るに、やはり出来るだけ早くユキの答えを聞きたかったのだろう。

それでも急かさなかったのは彼の人柄ゆえか。短い時間でも充分にわかるほど、アルフレート・フレイグルという人は温厚で優しい人間だった。

だかこそ、どうしてなのだろう、とユキは思う。

レヴィンがアルフレートに対して示す不自然な警戒と拒絶の空気。向けられたアルフレートは、面にこそ出してはいなかったものの、それをはっきりと感じているようだった。

はたしてレヴィン当人は自覚しているのかどうか。

この屋敷で暮らし始めて数日。その中で、レヴィンと顔を合わせた機会はさらに少ない。

だがそれでも最初に出会ったそのときでさえ、ユキに対するレヴィンの態度はアルフレートに向けるものよりずっと柔らかく優しいものだった。

どうしてそんなにも、アルフレートを警戒するのか。

その理由はアルフレート自身にあるのか。あるいはもっと別のも

のにあるのか。

ユキの中には幾つかの疑問が生まれた。

かたちを成すもの＜9＞

アルフレートが帰った後、昼食が再開されることはなかった。
エルマとゼルマは庭に出されたままのテーブルや食事をてきぱきと片付け始める。

何か手伝おうかと申し出ると、「ユキさまはレヴィンさまのお相手をお願いしますね」とエルマににっこりと笑って言われた。

「……で、ここまで来たのか」

ユキの話を聞いたレヴィンは手にしていたペンを机の上に置くと、困惑した様子で視線を泳がせた。

「困ってる?」

「いや。……そうだな、少し。相手と言われても、特に何もしてもらいたいことがない」

「邪魔?」

「それはない。……だが、ここにいても、おまえはつまらないだけかもしれないぞ?」

思ってもみなかった言葉に、ユキは首を傾げた。

「レヴィンはつまらない?」

「つまらなくはない」

「じゃあ、ここにいてもいい?」

「ああ。飽きるまでいるといい」

「うん」

頷いて、ユキは周囲をきょろきょろと見回した。

ユキが寝室として使っている部屋よりは幾分手狭な部屋である。室内には、四方の壁を覆うようにして置かれた無数の書棚と、いまレヴィンが向かっている机しか置かれていない。

初めて入る部屋だったが、その質素さは屋敷全体の雰囲気と変わらず一切の無駄がなかった。

必要最低限のものしか置かれていないその空間を寒々しいと感じるか、合理的と感じるかは見る者の感性次第だろう。レヴィンは後者なのだと、ユキは感じた。

「レヴィンは、後悔してる？」

「……なにがだ」

黙々と動かしていたペンを再び止めて、レヴィンは顔を上げた。

「私をここに置いていること」

「いや。どうしてそう思った？」

「私がここにいることが、レヴィンの迷惑になるんじゃないかと……思った？」

「……随分、自信がなさそうな台詞だな」

「ごめん。言ってる自分でもよくわからなくなった」

ユキは少し混乱して、視線を俯かせた。

この部屋を見ていて、ふと何気なく思ったのだ。

こんなにも無駄のない部屋を好むレヴィンが、自分という言ってしまう必要な存在をここに置いておく理由はあるのだろうか。彼が自分を拾ったのは、偶然と気まぐれなのだろう。ならば、その気まぐれはいつまで続くのか。

レヴィンに限って、ある日突然放り出すなんてことはしないだろ

う。

だが、内心で疎ましいと思われながらもこの屋敷にいななければならない日がいつか訪れるとしたら——それは想像するだけでとても怖い。

レヴィンとエルマとゼルマ。

考えてみれば、ユキの知る人間はこの三人だけなのだ。

この屋敷で生活するようになってから三日間。この三人だけが、ユキの世界のすべてだった。

それはとても安定した世界だったのに、そこへ今日、アルフレートという新しい存在が現れた。

どうして了承してしまったのだろう、とユキはいまさらながらに後悔した。

レヴィンはアルフレートを警戒していた。

それは嫌悪でないにしろ、少なくとも好意的な感情はまったくいってなかったように感じられた。

それをわかっていたのに、どうして自分は彼の要望に応えてしまったのだろう。

「……ごめんなさい」

「なに？」

「私、レヴィンの気持ちを考えなくちゃいけなかった」

レヴィンのためにはない。自分のために。

もっともっと注意しなければならなかったのだ。

彼を不快にすることのないように。

彼に疎まれることのないように。

「どういう意味だ」

「レヴィンに嫌われたくない……」

「嫌われる？」

「うん、」

どうすればいいだろう。

彼に嫌われたくない。嫌わないでほしい。

嫌われたら、自分はどうすればいいのだろう。

「ユキ？」

レヴィンが立ち上がった。

不審そうな顔をして、彼の黒い瞳がユキを見下ろす。

縋るようにそれを見上げた瞬間、温かいものが、頬を伝った。

「……………どうして泣く？」

なんだろう、とそう思う前にレヴィンが言った。

泣く？

どうやら自分は泣いているらしい。

では、頬を伝うこれは涙か。なぜ、こんなものが突然溢れてきたのだろう。

「……わからない。急に、怖くなって、」

「俺に嫌われるのが、か？」

「う……っん」

しゃくりを上げながら答える。

「不安になったか？」

そう言って、レヴィンは指先でユキの涙をすくった。
合点がいったとでもいうように、柔らかな表情を浮かべている。

「ふあん……」

「そうだ。おまえには、記憶がない。知っているのはこの屋敷の中だけで、だから不安になったんだろう」

「不安で、泣いたの？」

「自然なことだ。他に拠り所がないなら、誰だってそれに縋りたくなる。おそらくおまえの場合、いま急に思い至ったから混乱したんだ」

「……うん。急に思ったの。レヴィンに嫌われたらどうすればいいんだろうって」

ユキの言葉に小さく首肯すると、レヴィンは膝を折って、目線をユキに合わせた。

同じ色の瞳が、まっすぐに彼女を覗きこむ。

「大丈夫。嫌いになっていない。まだ会って間もないが、おまえの存在を疎ましいと思ったことはない。だから、不安に思うことはない。わからない。わかるか？」

一つ一つの言葉を短く区切って、まるで幼子に言い聞かせるようにレヴィンは言う。

その言葉は、ユキの胸に染み込んで、ゆっくりと溶けた。

「うん。わかる」

小さく答えると、やはり幼い子どもにするように頭を撫でられた。くしゃりと頭に触れる温かさが心地よくて、ユキは赤い目をしたまま微笑んだ。

かたちを成すもの＜10＞

赤くなった目を擦りながら笑うユキを見下ろして、レヴィンは静かに息をついた。

不安に惑う少女に安心するようにと言葉をかけながら、その実、安心していたのはレヴィンの方だった。

ほんの三日前。

初めてユキと出会い、視線を合わせた時。彼女のあまりに無防備で無垢なさまに、彼は微かな恐怖を覚えた。

この純粹無垢でまっすぐな瞳は、自分の中の汚いものや弱い感情を簡単に見透かしてしまうのではないかと。

無邪気であるがゆえに残酷に、躊躇いもなくそれを暴いて「どうして？」不思議そうに問うてくるのではないかと――そんな想像が脳裏を過ぎったのだ。

愚かな妄想だとは思ふ。だがどうしてもそれを拭えないまま、気がつけば不自然に視線を逸らして彼女の瞳から逃れようとしていた。

けれど。

レヴィンに嫌われたくないと泣いた彼女を見て、そんな妄想はあっさりと払拭された。

たった一つの抛り所に縋りつく弱さも、疎まれまいと必死で相手の顔色を窺う卑屈さも、まるで鏡に映った昔の自分を見ているようだったのだ。

不快だとは、けして思わない。

彼女にも言ったことだが、他に抛り所がないのならそれに縋りたくなるのは、人としてごく自然なことだ。

途端に、彼女を純粹無垢な存在だと妙に神聖視していた自分が滑稽に感じられた。

「……レヴィン」

落ち着きを取り戻し始めた少女が、ゆっくりと首を持ち上げて自分を見上げた。

交わった視線から、逃れようとは思わない。

「どうした？」

「お腹すいた」

端的な要求に、レヴィンは思わず笑ってしまった。

そういえば、アルフレート・フレイグルの訪問で昼食が中断されたままだった。

「厨房に……いや。エルマのことだから、このままここにいれば何か持ってきてくれるだろう。エルマはおまえがここにいることを知っているんだろう？」

「うん」

「なら、少しの辛抱だな」

「わかった」

聞き分けよく頷く少女の頭をポンポン、と二、三回、軽く撫でる。心なしか嬉しげに目を細めたユキの様子に、微かな心地よさを覚えてた。

この少女の存在は、自分にとってもまた、一つの拠り所になっていくのかもしれない。

そんな予感を、レヴィンは穏やかに受け止める。

「今日の昼食は中途半端に終わってしまったな。天気の良い日ので

も、また、外で食べるか？」

本格的に寒くなる前に、もう一度くらいは機会があるだろう。これから冬へ向かいつつあるこの国の気候は温暖だ。冷え込みは緩やかに、じれったくなるほどゆっくりと進んでいく。

「うんっ、またやりたい。……レヴィン、」

「うん？」

「ありがとう」

「……準備をするのはエルマとゼルマだぞ？　礼を言うならあの二人じゃないか」

「そうじゃなくて、」とユキは首を振った。もどかしそうに、溜息を吐く。

「いろいろ、たくさん。何がってはつきりと言うのは難しい。だけど、すごくて、感謝してるの。レヴィンが私を拾ってくれて、この屋敷に置いてくれて、エルマとゼルマに会わせてくれて、今日、一緒にご飯を食べてくれて、それから……えっと、人の顔を窺わないで好きに決めていいって言ってくれて、それを許してくれて、不安な気持ちを、受け入れてくれて……うん、本当は、きつともっとたくさんあるんだけど、うまく言えないや」

はにかんだように、ユキは淡く苦笑する。

何気なくレヴィンがしたことを、一つ一つ、丁寧に拾い上げて。

レヴィンは目を見開いた。

思いがけない言葉は、欲していたわけではないからこそ嬉しく、鮮烈に響いた。

どう反応していいかもわからず、しばらく黙り込んでしまうほど

に。

「……ごめん。意味、わからなかった?」

反応を示さない彼に、困惑したようにユキは視線を伏せる。
レヴィンは慌てて首を振った。

「いや、わかった」

それだけ言って、口を閉ざした。

それ以上は何を言えればいいのかわからなかったのだ。

気まずい思いから逃れようと再びペンを握って椅子に腰を下ろしたとき、「もしかして……」とユキは首を傾げた。

「照れてる?」

「……………」

たつぷり間を置いて、それでも最後に頷いたのは、尋ねたユキに揶揄する意図はないとわかっていたからだ。

ユキは大げさなほどに総合を崩して「よかった」と呟いた。

ノックの音が響く。

「あ、きつとエルマだ」

嬉しそうな顔をそのままに、小走りで扉に向かうユキの背中から机の上に視線を戻して、レヴィンは再びペンを走らせ始めた。

「残りものですが、軽く食べられる物をお持ちしましたよ。ユキさま、お腹が空いてらっしゃるでしょう?」

「うん、ありがとう。すごいね」

「すごい？」

「レヴィンが、エルマならきつともうすぐ食べ物を持ってきてくれるって」

「まあ、予想どおりだったわけですね。レヴィンさまとはお話できました？」

「うん、楽しかった」

「それはよかったですね」

部屋の入り口で言葉を交わす二人は、姉妹のように和やかだった。黙々と手を動かしながらも、レヴィンは静かな気持ちでそれを聞く。

ゆっくりと、少しずつ。

穏やかな時間が、かたちを成し始めていた。

おっぴの国へ1

ボード・マシユラムは無神経な人間だ。

無神経、と言うと聞こえは悪いが、ボードはそれを自分の長所だと考えている。

無神経さというものは、匙加減さえ間違えなければこのうえなく便利なものだ。

「それで？ お二人は俺に何を求めているんでしょう」

差し出された湯気立つ紅茶を一口飲んで、最低限の礼儀を踏まえたところで即座に本題を切り出したボードに、隣に座る青年は眉間にしわを寄せ、正面に座る青年はおかしそうに眉を持ち上げた。

対照的な反応だ。

「マシユラム、陛下はご休憩の最中ですよ」

隣に座っている、王佐アルフレート・フレイグルが静かに窘めてきた。

言葉の示唆しているところはせつかくのご休憩中に仕事の話など持ち込むべきではない、ということだが、ボードにはどうしても『雑魚が許しもないのに口を開くんじゃねえよ。御前が汚れるだろうが』と聞こえてしまう。

アルフレートが胸中で零す独白がどのようなものか、ボードには当然わからない。

口にする言葉と同様にお上品かもしれないし、想像を絶する毒舌を吐いているかもしれないが、いずれにしろいまの彼の心中にあるのは、ボードの無神経さに対する苛立ちだろう。

「それは申し訳ありません。俺みたいな下級武官を陛下の私的なお茶の時間に招くなんて異例ことでしょう？ てっきり何か非公式の命令があるのだろうと踏んでいたんですけど、勘ぐりすぎだったようです。ね。恥ずかしいなあ。失礼しました」

「……………」

眉間に刻んだしわを深めて押し黙るアルフレートから視線を外し、正面に座る青年を見る。

エイリック・ジア・プリシピア。この国の国王たるその青年は、穏やかな眼差しに微かな好奇心を乗せて、ボードの視線を受け止めた。

「ボード・マシユラム」

「はい？」

呼ばれた名に、にっこりと笑って軽く答える。

不遜な振る舞いと咎められるほどには酷くない、だが尊崇の念など欠片もないとわかる態度だった。

「仮に、すべて君の予想通りだったとしたら、君はどうする？」

「たかだか下級武官が陛下のご下命を拒否することなんて、まずないんじゃないでしょうか？」

「一般論じゃなく、君個人としての意見が聞きたいな。断るかい？ 受けるかい？」

面白がっているのがありありとわかる様子で、国王は問う。

おいおいそれはちょっと卑怯なんじゃないかな、とボードは内心で愚痴った。

それがどんな内容であるかも明かさずに、答えだけを求めるのか。

あくまで戯れの一環として。

ここで断りますなんて言っちゃった日にはとんだ不忠者になってしまうし、かといって気軽に陛下のご命令とあらばどんなことでもお受けいたしますよ、なんて言ったらどうなってしまうかわかったものじゃない。

年若いこの国王と直接顔を合わせたのは今日が初めてだったが、噂に違わぬ食わせ者なんだなあ、とボードは呑気に感心した。

「そうですね……陛下ともあろう方が下級武官のようなご命令を拒否するのも命がけのかよわい身分の者に内容も明かさなまま無理難題を突き付けるなんて暴虐なこと、しないでしようから。もしすべてが俺の予想通りだとしたら、その時の俺は、命令の内容がすべてわかったうえで拒否権も与えられて、判断することができるとでしょうね？」

「……それで？ 君は、どうするの？」

ボードの問いには答ええないままに、国王は再び問う。

うわ、それ卑怯だなあ。

さすがに質問に質問で返して許されるのは一度までだろう。本来ならば一度だって許されるものではなのだが、いまは戯れの時間。けれどだからこそ、同じ方法を二度使うことはできない。あくまでお遊びの空気の中だからこそ、この無神経さは有効なのだ。

ボードは軽薄な笑みを浮かべた。

「さあ？ わかりません」

「国王の問いに、答えられないかい？」

「滅相もない。きちんとお答えしてます」

「それが、わからない、なのかな？」

「はい。だって、いくら陛下のご命令とはいえ、内容もわからないのにはいはい答えるわけにはいかないでしょう？」

へらへらと笑いながらボードは言う。

「ボード・マシユラム。いまの発言は――」

「陛下、俺は無神経な人間なんです。そしてここは陛下のお茶の時間、非公式な場です」

口を挟もうとしたアルフレートの言葉を遮って、ボードは続ける。

「それで？」

「陛下が家臣の無神経さを許せるご寛容さを持っていると信じて正直に申し上げたいことがあります」

「言ってごらん」

「疲れました」

一瞬の間を置いて、アルフレートが席を立った。

「ボード・マシユラム！ 貴様ッ！」

「座るんだ。アルフレート」

間髪入れずに告げられた国王の言葉に、アルフレートは即座に席につく。

うわ、よく躰けられた犬だなあ、とボードは内心で笑った。

「家臣の無神経さを許せる寛容さ、ね。持っているのかは知らないけれど、この場でのボード・マシユラムの発言は問題にしない。僕

が許したことだ。わかったね、アルフレート？」

「はい」

「さて。ボード・マシユラム？」

「はい？」

「意地の悪いことをしてすまなかったね。今日君を呼んだのは、たしかに君の言う通り、非公式の頼みごとがあったからだよ」

だったら早くそう言ってほしかった。まわりくどいことなんてせずに。

無論、そんなことは口に出せないが。

「そうなんですか。じゃあ俺は試されていたんですね。なら仕方ないですね」

わざとらしく言う。

アルフレートが隣で咳払いをした。一方の国王は、クスリと笑う。

「君の言うその無神経さを買おうと思う。一人の少女の護衛を頼みたいんだ」

「陛下のご愛妾ですか？」

「……貴様、」

低い声でボードを睨みつけるアルフレートを、国王は手で制する。

「……ふふ、君は本当に、僕のことを尊敬してないんだね」

「そんなことはありませんよ。それで、その少女というのは？」

「うん。名前はユキ、というそうだよ。ティシャル公爵の庇護下にある」

「公爵？」

そんな地位にある人間が庇護している者に、どうしてわざわざ護衛をつけなくてはならないというのだろう。

そんな疑念が脳裏を過ぎったが、あえて問わないことにした。知るべきことは、他にある。

「俺は、どんなことを警戒すればいいんでしょう」
「さあ？ わからないな」

楽しそうにっこりと笑って、国王は言った。

おじいさんの国へ2人

たった一人に分かち合ってほしい願うことは罪だろうか。理解を求めることは悪なのだろうか。

それでも、背負い続けてゆくにはあまりに重いのだ。この弱さを、身勝手を、どうか許さないでほしい。

その日、ユキとレヴィンが屋敷を立ったのは昼過ぎのことだった。王城へは馬車で向かう。二頭の馬が引く箱形の車は、こんな機会でもなければ滅多に使用されることはないらしく、数日前からゼルマが点検や補修をしていた。

「歩いていけない距離なの？」

黙々と作業をするゼルマの姿を見ながら、レヴィンに問うと

「そんなことはない」

と、意外な答えが返ってきた。

ならばどうしてこんな面倒くさいものを用意するのだろう。疑問をそのまま口にする、レヴィンは嘲るような冷たい笑みを浮かべた。

「貴族というのは体面を重んじる生き物だからな」

皮肉げに歪んだ唇は、それきり硬く閉ざされて、その日はずっと沈黙したままだった。

理由はわからないが、レヴィンはどうも貴族というものに嫌悪感を抱いているらしい。

アルフレートに対する警戒した態度も、そのせいだったのではないかとユキは思った。

けれど他ならぬレヴィン自身も、貴族の一員なのだ。その事実を、彼はどう受け止めているのだろう。

思いのほか揺れの激しい馬車の中で、ユキはそつとレヴィンの表情を窺った。

馬車の中には、レヴィンとユキの二人きりだ。

御者台にはゼルマがいて、残るエルマは屋敷で留守番をしている。

「そんなに気に入らなかったのか？ そのドレス」

目があった瞬間、困ったように僅かに眉尻を下げて、レヴィンがそう言った。

出発前、早めの軽い昼食を済ませた後に、エルマが用意した余所行きの服を巡って、一悶着があったのだ。

普段ならば飾りの少ないシンプルなワンピースを着ているユキに、その日エルマが用意した服は、レースとリボンがふんだんにあしらわれたドレスだった。

重そうで邪魔そうで、そのうえどこかに引っかけて破ってしまいそうで、嫌だと必死で首を振ったユキの意思表示は、エルマの「だ

めです」の一言の前にあっさりと一蹴された。

笑顔で放った一言が、どうしてあんなにも逆らえない迫力を持っているのかユキにはわからない。多分これから先もずっとわからないままの気がする。

不満を持て余して唇を尖らせていたユキに、レヴィンは溜息を吐きながら「諦めろ。その方が楽になれるぞ?」と言って視線を伏せた。

諦観しきったその様子にはなんだか奇妙な説得力があつて、ユキは素直に諦めることにした。

ユキの中では、それでドレスの件に対する不満はすっかり消えてしまったのだが、レヴィンはそうは思っていなかったらしい。

「さつきから、なんだか難しい顔をしているぞ。嫌なのはわかるが、今日一日だけのことだからなんとか我慢してくれるか?」

宥めすかすように優しく言って、くしゃりと頭を撫でてくれる。

ユキはレヴィンに頭を撫でられるのが好きだった。

他者を拒絶するようなどこか冷たい雰囲気を持つているこの青年が、手を伸ばして自分に触れてくれることが、とても嬉しい。

ここにいてもいい。

自分は、この人に受け入れられている。

頭を撫でられるということは、それを実感することのできるわかりやすい形だ。

レヴィンがそれを理解しているのかどうかは知らないが、少なくともユキが喜んでいることはわかっているらしい。

アルフレート・フレイグルが訪ねてきたあの日から、レヴィンは頻繁にユキの頭を撫でるようになった。

「……ドレスのことは、もう気にしてないよ」

ぼそりと呟いて、ユキはレヴィンの誤解を解く。

ドレスのことではないなら、では何を考えていた？　そう問われるだろうことを予想しながら。

「違うのか？　じゃあ、いったいどうした」

さあ、何と答えればいいのかだろう。

あなたは貴族が嫌いなのか。あなた自身も貴族であるのに？

胸中の疑問をそのままぶつけることは躊躇われた。

そこに踏み込んでいいものかどうか、それがユキにはわからない。いっそ、ドレスのことを気にしていたのだと、そういうことにしておけばよかったのだろうか。

僅かの間にぐるぐると思考を巡らせて、ユキは結局、口を開いた。

「大丈夫？」

何が、とは言えなかった。

もしもそう問われてしまったら、ユキは困惑したことだろう。

「……………」

レヴィンは沈黙した。

考えあぐねるような、途方にくれた感じで黒い瞳がユキを見る。

ああ、失敗した、とユキが思った瞬間、ふっ、と密やかな吐息の音が漏れた。

「……大丈夫だ」

レヴィンもまた、何が、とは言わずにそう答えた。
困惑したような、それでいてどこか穏やかな微苦笑を浮かべて。

大丈夫、と、その言葉の前に省略されたものを、レヴィンがどう理解したのかはわからない。

あるいはそれは、ユキが言わんとしたものとはまったく違うものであったのかもしれない。

そもそも自分が具体的に何に対して大丈夫かと問いたかったのかさえ、ユキにははっきりとはわからなかった。

ただ、自分が彼のことを考えていたこと。

それさえ伝われば、いいと思った。

おっいの国へ3人

王城へと到着した馬車は、城へ預けるものらしい。

大きな門の前で停車した馬車からレヴィンに促されて降りたユキは、眼前にそびえたつ王城の華やかな迫力に目を見張った。

白壁の城は、その巨大さもさることながら、壁面の至るところに彫り込まれた精巧な彫刻に圧倒される。

この大きな建物は、いったいどれだけの時間と人手を費やされて築かれたのだろう。それを思うと途方もない。

「では、帰る際にまたお迎えに上がります」

相変わらず眠たそうな声で御者台に立つゼルマが言った。

御者として同行した彼は、国王との会見には同席できない。用事が済むまでの時間を馬車とともに所定の場所で待つのだそうだ。

「ああ」

短く頷くレヴィンの後ろから、「またね」とユキは手を振った。

ゼルマはそれにぺこりと一礼すると馬車を動かしてその場を離れていく。

遠ざかっていく馬車を見送ってレヴィンを見上げると、彼は「迎えが来ているはずだ」と言いつつ周囲を見回した。

つられてユキもきょろきょろと視線を巡らす。

人の出入りの激しい王城の門前で、ただ一人動かずこちらを見ている者がいた。

年若い青年だ。

おそらく何かの制服なのだろう、先ほどからすれちがう人の中でちらほらと見かける深緑の衣服を身に纏っていた。

腰には剣を佩いている。兵士なのだろうか。

視線が合うと、青年はゆっくりとこちらに近づいてきた。

「ティシャル公爵、ならびにユキサまでお間違いないでしょうか」

無言のままレヴィンが首肯する。

「お待ちしております。私はボード・マシユラムと申します。本日はお二方をご案内せよとの命を受けております」

ボードが微笑んだ。

その笑みさえも礼儀のうち、というような、事務的な笑みだった。

「よろしく頼む」

レヴィンのその言葉を合図にするように、「かしこまりました」と答えたボードは歩きだした。

つまりついてこいということなのだろう。

前を歩くボードの背に従いながら、二人は王城の中へと足を踏み入れた。

ややしばらく進んでいくと、広く華やかだった廊下が次第に狭く折れ曲がったものへと変化した。

人の通りも極端に少なくなっていく。

どんどんと寂れた場所へ入っているようだった。

本当にこんな場所にこの国で一番偉い人がいるのだろうか、とユキは戸惑った。

それがよほど面に出ていたのだから、それまで口を開かなかったレヴィンが「どうした？」と尋ねてくれた。

「どうしてどんどん寂しい場所へ行くの？」

思ったままを口にしたユキに、レヴィンは納得したように「ああ、」と頷いた。

「これが非公式な会見だから、と言えはわかるか？」

「……うーん、秘密ってこと？」

「まあ、そうだな」

なるほど、と納得がいった。

秘密にしておきたいことを、わざわざ人の多い場所でするわけがない。

だがどうして秘密にしたいのか、それはわからなかった。

レヴィンに問おうとしたところで、前に行くボードが「こちらです」と言って足を止めた。

それは、普通の扉だった。

というのも、廊下を進んでいく最中には、もっと豪華な装飾が施された見るからに特別な感じのする扉が幾つもあったのだ。

こんな変哲もない部屋に一国の王がいるとは誰も思うまい。

確かに国王は、今日会うことを秘密にしておきたいのだな、と感じた。

「お客人をご案内いたしました」

扉の外からボードが告げる。

ややあって「どうぞ」と聞き覚えのある声が入室を促した。これはおそらくアルフレートの声だ。

「失礼します」

ボードは静かに扉を開けると、「どうぞ、お入りください」とこちらを振り返った。

レヴィンに続いて恐る恐る部屋の中に足を踏み入れたユキは、立ち上がってこちらを迎え入れているアルフレートの背後に一人の青年の姿を認めて、息を呑んだ。

この人が、国王。

誰に言われるまでもなくそれがわかる。

大きなテーブルを囲むようにして幾つかの椅子が置かれているだけの、さして広くもないその部屋で、ただ一人最奥に着席しているその人は、穏やかな瞳に静かな理性を湛えてこちらを見ていた。

「突然呼びだしてすまなかったね」

国王は、その碧玉の瞳にレヴィンを映すと、労うようにそう言った。

誰が聞いてもわかるほど、親しみのこもった優しく柔らかな声だった。

「お久しぶりでございます、陛下」

レヴィンは深々と頭を下げた。

国王から向けられた親しみには気づかないとでもいうように、丁寧だが距離を置いた態度だった。

国王はそれを気にしたふうもなく、今度はユキに視線を向けた。

「そちらが？」

「ユキです。はじめまして」

すっかり傍観を決め込んでいたユキは、少し緊張しながらも慌てて頭を下げる。

「はじめまして。僕はエイリック・ジア・プリシピア。職業はこの国の王、だね。それから――」

言いかけた国王は、途中で何かに気づいたように言葉を止めた。

「すまない。会えたことが嬉しくて舞い上がってしまったね。二人とも、構わないから座って？ アルフレートも。ボード、君もだよ」

その言葉に、驚いて振り返ったのはユキだけではなかった。

てつきり案内役だけかと思っていたボードという名の青年が、まさかこの場に同席するとは。

レヴィンも啞然とした顔で、背後に立つボードを見ていた。

二人から注目されたボードは、困惑はしているが驚愕はしていないようだった。

どこか面倒くさそうに溜息を一つ吐いて、席に着く。

どうやら、自分がこの場に同席することになるのは知っていたらしい。

全員が席に着いたのを見て、国王は満足げに微笑んだ。

「さて、自己紹介が途中だった。どこまで言ったかな。そう、僕の職業は国王。ここまでだったね。続けても大丈夫かな？」

誰も答えない。

レヴィンとアルフレートが困ったように自分に視線を向けるのを感じて、この自己紹介が自分のためだけにされているものなのだと、いまさらながらにユキは気づいた。

「はい。続けて……ください」

「うん。ああ、無理に敬語は使わなくてもいいよ？　ここは非公式の場だからね。レヴィンに対するのと同じように話してくれればいい。気楽にね。僕は、レヴィンの兄だから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9827k/>

最後の神が護る国

2011年10月7日01時29分発行